

『尼僧への鎮魂歌』における法とホワイトネスの構築

平塚博子

序

『サンクチュアリ』(1931)の発表からほぼ20年のときを経て、その続編として書かれた『尼僧への鎮魂歌』(1951)において、フォークナーは再び法と女性のセクシュアリティという問題を扱っている。『サンクチュアリ』において、テンブルら女性登場人物たちの経験を、法そして人道主義的弁護士ホレスという2種類の「正義」の枠組みに入れることで、法とホレスのパターナリズムに潜む家父長制的価値観を前景化し、その限界を暴き出した。この作品においても、フォークナーは、弁護士ギャビン・スティーブンスを登場させることで、テンブルとナンシーといった女性たちの物語を法律というコンテキストに置いている。しかし、『サンクチュアリ』のホレスが女性登場人物たちを「救う」という点では全く無力だったのとは異なり、『尼僧への鎮魂歌』のギャビンは、テンブルとナンシーの「更生」に成功している。

『尼僧への鎮魂歌』における弁護士像の変化と法をめぐる言説の変化は、この作品が書かれた1940年代後半から50年代初頭の人種をめぐる法に揺れる南部、とくにホワイトネスをめぐる状況と密接に関係していると考えられる。Ruth Frankenbergは、ホワイトネスが単なる白い肌を意味するだけでなく、白い肌を持つ人々が享受する特権さらには世界観をも意味するとして、次のように述べている。

First, whiteness is a location of structural advantage, of race privilege. Second, it is a “standpoint,” a place from which white people look at ourselves, at others, and at society. Third, “whiteness” refers to a set of cultural practice that are usually unmarked and unnamed. (1).

当時の最高裁が人種分離を違憲とすることで、南部社会におけるホワイトネスの持つ意味を日々曖昧化していったのに対し、『尼僧への鎮魂歌』の法は、南部白人男性主体形成をめぐる問題を浮き彫りにしながら、ホワイトネスとは何かという問題を問い直す。このような意味でこの作品は、公民権運動が胎動する南部におけるホワイトネス構築についての考察のテキストとなっている。

本稿では『尼僧への鎮魂歌』の法を、1940年代から50年代の人種に関する法をめぐる言説と、女性登場人物との関係の中で分析する。そうすることで、ギャビンを南部の良心と見る比較的初期によくみられた解釈(Vickery, Millgate, Watson)や、テンブル、ナンシーといった女性登場人物の主体性に着目したフェミニスト的解釈(Polk, Morland,

Reams) という作品の解釈の主要な流れを踏まえつつ、1940年代後半から50年代にかけての南部社会とホワイトネス構築への考察としての『尼僧への鎮魂歌』の再解釈を試みたい。

I.

南部における人種差別撤廃運動の歴史は二つの世界大戦と大きく関わっている。世界大戦参戦によって発生した北部の工場労働者不足と、それに伴って大量に北部へ移動した黒人が賃金労働者となり経済力をつけたこと、さらには大戦で民主主義のために戦った黒人帰還兵達の差別撤廃に対する意識の高まりは、訴訟という手段を用いた黒人たちの活動を活発化させた。1930年代の終わりから活発化する黒人差別撤廃運動に呼応するかのようになり、これまで人種差別に関しては州法を尊重してきた最高裁が、撤廃にむけて踏み込んだ判決を出し始める。¹プレッシー対ファーガソン事件判決以来の「分離すれども平等」という原則に、最高裁が初めて異議を唱えたのは、1938年のミズーリ対カナダ事件判決である。黒人の州立大学ロースクール入学の拒否を巡って州を相手取って争われたこの裁判において、ミズーリ州は修正第14条に反するとの判断を最高裁は下した。

40年代にはいると、この流れは南部社会の様々な領域で一気に加速する。最高裁は1941年ミッチェル対合衆国事件で、鉄道会社がブルマンの寝台を白人だけに提供するのは、州際通商法に違反するとした。続いて1944年のスミス対オールライト事件では、白人専用の小学校は違憲であるとの判決が下される。1946年のモーガン対ヴァージニア事件では、州境を超えて移動しているバスの人種分離を定める州法が無効とされた。さらに1948年のシェリー対クレイマー事件で、最高裁は住宅の売買契約に黒人には売却しないという条件を盛り込むのは違憲であるとの判決を下す。2年後の1950年にはスウェット対ペインター事件の判決で、黒人専用の法科大学院が存在するもののその設備が不十分だとして、最高裁はテキサス州に黒人学生の入学許可を命じた。こうした最高裁判決は、公立学校における人種別学は、いくら施設や建物が同じ内容であっても平等とはいえないとの画期的な判断を下した、1954年5月のブラウン判決へと大きく展開してゆく。1930年代終わりから50年代に出されたこうした最高裁判決によって、南部の人種をめぐる言説、つまり法によって白人と黒人の世界が区別され、白い肌が絶対的価値をもつ南部の世界観は大きく揺れ動くこととなる。

しかし、ブラウン判決によって人種問題が解決を見たわけではなかった。この判決を北部の価値観の押し付けと捉えた南部諸州は、激しい反発を開始する。判決をうけて南部の一部では、人種別学の廃止が進んだものの、深南部では人種別学を義務付ける法律を通す、公立学校を閉鎖するなどの反動的な措置を取る州が出現する。判決に対する南部の反発は、判決から10年経っても旧南部連合に所属した11の州で、白人と同じ学校に通う黒人生徒は、黒人生徒全体の僅か2パーセントであったという事実で顕著に現れている。このような南部諸州の動きに対して、全米有色人種地位向上委員会は、訴訟という手段でもって

応戦した。このようにこの時期の南部において黒人と白人は、ホワイトネスが持つ意味をめぐって、法を使った緊迫した駆け引きを行っていたといえる。

揺れ動く社会を反映するかのよう、この時期フォークナーは、人種問題に関して様々な発言をしている。²時に南部における人種問題は非人道的だとするリベラルな発言をする一方で、アラバマ大学への入学を求めた黒人女子学生ルーシー嬢を巡る事件に対するコメントが示すように、フォークナーは国家と法による南部の人種問題介入には否定的な姿勢を見せた。そして時に進歩的で時に反動的なあいまいな姿勢ゆえに、フォークナーは白人からは「黒人鼻唄」として、黒人活動家からは「漸進主義者」として、両者から批判されることとなる。³この時期の南部における人種と法とを巡る大きな動きと呼応するかのよう、フォークナーは40年代から50年代にかけて『墓地への侵入者』(1948)、『駒さばき』(1949)、『尼僧への鎮魂歌』とたて続けに人種と法の問題を扱った作品を執筆している。フォークナーはこうした作品の法を通して、南部におけるホワイトネス構築の問題を繰り返し探求する。『尼僧への鎮魂歌』における法は、女性のセクシュアリティの問題と絡めることで、ホワイトネスの構築を異人種間の対立という枠組みを超えた問題として提示する。

II.

1940年代から50年代にかけて最高裁が黒人の地位を高め、権利を守る判決を次々と出したのとは対照的に、『尼僧への鎮魂歌』に出てくる法は黒人、インディアン、女性を他者化し、抑圧するものとして機能する。この作品における否定的な法の描写は、法権力に潜むレイシズムやセクシズムを露呈すると同時に、ギャビンが体現する南部の正義/法と対置されることで当時の南部白人のホワイトネスの揺らぎを逆説的に映し出す。

家父長制的抑圧としての法は、作品冒頭のテンブルの子供を殺したナンシーを裁く法廷シーンでまず明らかされている。8年前に売春宿で恋人レッドに書いたポルノグラフィックなラブレターを種に、いまや人妻となったテンブルはレッドの弟ピートにゆすられる。そうしているうちに、8年前のレイプ事件のことで夫に常に罪悪感を抱きつつ、貞淑な妻を演じなければならなかったテンブルは、つらい結婚生活から抜け出すためにピートとの駆け落ちを決める。それを知り、テンブルの家族が崩壊するのを防ごうとした黒人のメイドのナンシーは、止めさせるために駆け落ちの資金や宝石を隠す。しかしそれでもあきらめないテンブルを引き止めるため、最終的にナンシーはテンブルの生後6ヶ月の娘を自らの手にかけて殺す。ナンシーはそれによって裁判にかけられののだが、この法廷が定義するのは、黒人のステレオタイプである放埒な性“ex-dope-fiend nigger whore”と犯罪者“murderer”としてのナンシーであり、スティーブンス家の精神的支柱であり、“nurse, guide, mentor, catalyst, glue”としてのナンシーではない(136)。

さらに『尼僧への鎮魂歌』のテキストは、抑圧的なシステムとしての法をジェファソンの歴史というコンテクストにおくことで、通時的に明らかにする。この作品は劇という形

式をとり、ト書きの部分でジェファソンの歴史が語られている。そのト書きの部分で、文盲のインディアンの女性首長マハトマの物語が明かされる。文字の書けないマハトマは、自らの部族の移住を受け入れる書類に X の印をサインすることで、部族のジェファソンの地からの追放を決定づける。Reams は、性と人種という二つの点で抑圧されていること、さらにマハトマは部族の移動をうけいれる X という文字を記すという行為によって、またナンシーの場合はテンプルの子供を殺すという行為によってジェファソンの白人社会から追放されるという運命に、二人の関係性を見出している(38)。『尼僧への鎮魂歌』においてマハトマとナンシーを他者化する法は、共同体でのレイシズムとセクシズムを象徴するとともに、それらを正当化する手段として歴史的な連続性のなかで前景化されている。

フォークナーは『サンクチュアリ』においても、法の男性至上主義的言説を批判的に描いている。しかし『尼僧への鎮魂歌』の法は、の人道的弁護士ギャビンの存在によって『サンクチュアリ』とは異なる意味合いをもって立ち現れる。なぜなら法が救えなかった南部社会のアウトサイダーを、南部の正義を象徴するギャビンが「救済」し「更正」させるからだ。『サンクチュアリ』には見られない「法に対する南部の法/正義の勝利」というこの構図は、最高裁判決によって、「人種分離」という伝統が揺さぶられている1940年代から50年代の南部社会と、南部白人の不安を陰画的に浮かびあがらせる。さらにブラウン判決と逆行するかのように、被抑圧階級救済において無力なこの作品の法は、人種問題に対してリベラルな姿勢を示しながらも、国家や法による人種問題への介入には断固反対したフォークナー自身の、人種と法にたいする複雑な心理をも想起させる。しかし、ギャビンの存在がこの作品の中で映し出す当時の法と人種をめぐる南部の状況ばかりではない。『尼僧への鎮魂歌』のテキストは、ギャビンを通してホワイトネスの構築を、人種間の問題から、ジェンダー、セクシュアリティが複雑に交錯する問題として提示する。

III

甥の娘を殺した黒人女ナンシーの弁護を引き受け、その助命嘆願をさせるべくテンプルを知事のもとに連れていくギャビンの姿勢は、黒人、インディアン、女性を周縁化する法とは対照的である。テキストのなかでギャビンは共同体の正義を守るものとして、次のように描かれている。

a sort of bucolic Cincinnatus, champion not so much of truth as of justice, or of justice as he sees it constantly involving himself, often for no pay, in affairs of equity and passion and even crime too among his people, White and Negro both, sometimes directly contrary to his office of Country Attorney which he has held for years, as is the present business.(43)

このようなギャビンについて、Vickery や Millgate のような初期の批評家はギャビンを「道

徳の担い手」として、テンブルを導くと論じている (Vickery 124、 Millgate221-226)。Vickery や Millgate が指摘するように、法が明らかにできなかったナンシーの殺人の動機を明らかにし、テンブルの家庭を守るという意味では、ギャビンは共同体の徳の担い手として機能している。Watson は、「徳への導き手」という見方をさらに進めて、ギャビンのテンブルに過去を語らせるという役割に着目して次のように述べている。

Requiem focuses upon the socratic activity of teaching to speak, as Gavin in a kind of ex post fact cross-examination, struggles to elicit from Temple Drake Stevens the untold story behind the death of her child, to lead her toward wisdom but also toward expiation—or, as one of Faulkner’s fellow cartographers of the psyche would have put it, toward talking cure.(177).

Watson によれば、テンブルに隠蔽していた過去を話させるギャビンの行為が、テンブル「癒し」へと導いているとしている。

しかしここで重要なのは、Vickery らが言うようなギャビンによる「徳への導き」、あるいは Watson が指摘した「癒し」の行為が、同時にホワイトネスの構築におけるジェンダーとセクシュアリティの複雑な関係を露呈するということだ。ギャビンがテンブルに求めるのは、自らの過去つまり彼女のセクシュアリティについての告白であり、さらにそれを「罪」として認めることだ。ナンシー恩赦を求めてギャビンとともに知事を訪れたテンブルは、8年前のレイプ事件後から、世間から「娼婦」として見られている自分を自嘲的にこう話す。“You remember Temple: all-Mississippi debutant whose finishing school was the Memphis sporting house? About eight years ago, remember?”(101) このように社会から「娼婦」としてレッテルを貼られたテンブルは、社会的に認められた上流階級の貞淑な妻つまり「スティーブンス夫人」としてのアイデンティティをまもって生きることで自分の人生をコントロールしようとする。“Temple Drake is dead”と言って過去の自分を封印しようとするテンブルに、ギャビンは、“The past is never dead. It’s not even past”と過去と向き合うことを求める(80)。

ギャビンはテンブルの語りにたびたび介入しながら、テンブルを良き妻、母へと「更正」させてゆく。時に彼女の語りを訂正し、時にはテンブルに代わって彼女の物語を語りながら、ギャビンは、テンブルにレッドに対して書いた手紙が象徴する彼女のセクシュアリティについて語らせる。テンブルは、ギャビンと知事に対して “I even thought that I had forgotten about the letters until they turned up again and then I found out that I not hadn’t forgot about the letters, I hadn’t reformed.” と語り自らの「罪」を認める(130)。さらにギャビンは、「告白」とそれに続く「更正」を確実にするために、テンブルが自分の過去をひた隠しにしてきた夫ガウアンを彼女に内緒でその場に同席させさえする。テンブルのセクシュアリティの放棄の先に、ギャビンが求めるものは母性への回帰である。ギャ

ピンはテンブルに次のように説く。“You came here to affirm the very thing which Nancy is going to die tomorrow morning to postulate: that little children, as long as they are little children, shall be intact, unanguished, untorn, unterrified.”(181) ギャビンとテンブルのセクシュアリティめぐる問題について、Noel Polk は、『尼僧への鎮魂歌』をテンブルの性の歴史を裁く文化の集合的な試みについての物語だとした上で、ギャビンを“The culture is personified in the ruthless figure of Gavin Stevens, who is not just a surrogate for Gowan but for a culture itself.”と断じている (*Children*, 159)。

Polk が指摘するように、ギャビンは南部家父長制文化に根ざすセクシズムを劇化している。しかし『尼僧への鎮魂歌』にテキストは、もう一人の母ナンシーを復活させることによって、この作品のジェンダーの問題を、人種そしてホワイトネスの問題へとシフトさせる。テンブルの母性への回帰を完全なものとするために、テンブルの告白の中でギャビンが復活させるのは自己犠牲的な乳母としてのナンシーである。法廷でナンシーは、黒人女性のステレオタイプである「売春婦/殺人犯」として定義されたが、テンブルの告白のなかでは、黒人女性のもうひとつのステレオタイプである自己犠牲的マミーとして生まれ変わっている。テンブルは自らの過去を語る過程で、ナンシーの殺人の動機が、テンブルの子供の将来を思っただけのことであったことを明かす。出て行こうとするテンブルを引き止めようとして発する “I ain’t talking about any household or happiness neither.... I am talking about two little children”(163)というセリフが示すように、ここで描かれるナンシーは崩壊寸前の家庭で、献身的に白人の子供を守ろうとする乳母としてのナンシーである。⁴ギャビンは、ナンシーによる殺人が、テンブルの子供を「世の常の正当な家庭つなぎとめて置くために」、「手持ちの最後の駒である自分の命を投げ出した」行為であることを、告白を通じてテンブルに明らかにさせるのだ (178-79)。

テンブルのセクシュアリティの放棄と母性への回帰そして、乳母ナンシーの自己犠牲によってギャビンが回復するのは、貞淑な妻/母である南部淑女と白人家庭に献身的に使える黒人乳母に支えられた、古き良き南部の家庭像である。Grace Elizabeth Hale は再建期以降の南部での、人種とジェンダーのイデオロギー維持について、家庭とくに黒人家政婦の存在の重要性を指摘する。Hale は、黒人家政婦が、新南部の白人家庭において旧南部社会を再現することによって、雇い主である白人女性に権威を与えていたと論ずる。家庭における白人女性の権威とともに黒人乳母の存在が支えるのは、純粹で性的に受動的な南部淑女という虚構である。Hale はように述べている。

Crossing both time and space, the black mammy supported another crucial New South fiction, the southern lady—an image of white purity and gendered passivity celebrated by white southern male writers from radical racist Thomas Dixon to the liberal W.J. Cash(105).

Hale は、黒人家政婦の「黒さ」という他者性によって成立する白人家庭が、人種とジェンダーに関するイデオロギーの再生産の場として機能していたと結論付ける。

The white home as the symbolic site of southern whites' gender and racial identities existed in opposition to a darkness both inside and out. But as segregation expanded and left the white home an integrated space within an increasingly racially separated world, the relationship between white southerners and black women domestics become crucial to the reproduction of white supremacy (115)

人種分離の新南部において、ホワイトネス構築と家庭における黒人、白人女性の存在の密接な関係を Hale は指摘している。

テンブルのセクシュアリティと、「貞淑な妻/母と献身的な乳母」という家庭像へのギャビンの執着は、Hale が指摘する白人家庭とホワイトネスの関係を想起させながら、『尼僧への鎮魂歌』のテキストを南部家父長制文化批判から、ホワイトネスについての探求のテキストへとシフトさせる。物語の最後で、悔い改めたテンブルは良き妻/母となるべく家庭へと戻り、ナンシーは白人家庭のために進んで犠牲となる理想的な乳母として死んでゆくことで、二人の女性は伝統的に定められた役割を受け入れている。『尼僧への鎮魂歌』は法という正義が回復できなかった秩序を、ギャビンという南部の法が回復するテキストともいえる。Sharon Desmond Paradiso は、登場する全ての作品においてギャビンが、“terrorizing whiteness at its most pernicious”だとした上で、ギャビンにとってのホワイトネスの問題が異人種間の対立の外側にあることを次のように指摘している。“He protects whiteness not so much from blackness, which is, to Gavin, really no threat, but from whiteness who would corrupt the status quo of caste and class that makes up Gavin's South—Temple, for instance, or the encroaching Snopeses”(39-40)。Paradiso が指摘するように、『尼僧への鎮魂歌』において南部社会の縮図ともいえる家庭を守るために、ギャビンが戦うのは白人女性テンブルのセクシュアリティである。このギャビンの女性のセクシュアリティの否定と伝統的な家庭像へのこだわりは、同時に家庭というプライベートな空間を、人種、ジェンダー、セクシュアリティという様々な力学が作用するホワイトネス構築の場として陰画的に浮かび上がらせている。

IV.

『尼僧への鎮魂歌』のテキストは、白人女性を淑女として黒人女性を乳母として他者化する南部白人至上主義を最終的には是認する。しかしその一方でこの作品においてフォークナーは、ギャビンや法が象徴する言説を、一時的にはあっても攪乱する女性たちを描いている。こうした女性たちはホワイトネス構築の裂け目を示唆し、それが1940年代

から50年代の人種とホワイトネスをめぐる問題へのより深い考察として機能している。『尼僧への鎮魂歌』のなかでフォークナーは、この裂け目を女性達の時空を越えた連帯と差異によって劇化している。

攪乱する女性たちの連帯にナンシーとテンプルがまず挙げられる。ナンシーは、被告人は罪状認否は否定するという慣習を破り、“Yes, Lord.”と答えることで、ナンシーは家父長制的な法廷の言説を攪乱する(45)。⁵テンプルは過去の告白のなかで、ギャビンや知事にしばしば介入されながらも、自身のセクシュアリティを自分の言葉で語り直している。そしてこの行為は、家父長制的な言説によって定義されていた自己を再定義し、ある程度の主体性をテンプルに与えている。テンプルは家父長制的なナラティブが「娼婦」の物語をと定義した自らの過去を、自ら語り直すことでそれを抜け出そうとする。⁶テンプルのレイプ事件について、次のように述べている。“I fell what I called in love with him and what it was or what I called it doesn't matter either because all that matter is that I wrote letters... The letters. They were good letters. I mean – good ones.... Better than you would expect from a seventeen-year-old amateur” (127, 129, 130).ここでテンプルは、スキャンダラスなレイプ事件を、恋人レッドとの愛の物語、さらには自らの創造性の物語へと変容させている。二人の女性は、ホワイトネス構築の基盤となる、ステレオタイプの女性像を拒絶する。さらに南部家父長制社会のアウトサイダーという共通した経験は、テンプルとナンシーの二人を、人種、階級さらには被害者と加害者という立場を超えて結び付けている。テンプルはナンシーについて、“the ex-dope-fiend nigger whore was the only animal in Jefferson that spoke Temple Drake's language.”と、述べている (136)。

『尼僧への鎮魂歌』のテキストはさらに、テンプルとナンシーの関係に見られる女性のレジスタンスと連帯を、ト書きに登場する女性たちとの連帯へと拡げる。例えば、ト書きの部分で登場する牢番の娘セシリア・ファーマーは、テンプルらと同様に家父長制的な文化という枠組みの中で沈黙させられ、許された唯一の自己表現としてはめていた指輪で、窓に自分の名と日付を記す。セシリアのこの行為は、テンプルがレッドに書いたラブレターを連想させる。さらにこのト書きの部分では、南北戦争で南軍が負けてしまったあとにおいても、決して“屈することのない”「執念深い」南部の女性たちの存在と、その不屈の精神の存在も語られるが、それはテンプルや、ナンシーへと受け継がれるレジスタンスの精神の遺産とみることにもできる。直接交わることのないト書きに登場する女性たちとテンプルそしてナンシーの関係について、Morland は、窓に記されたセシリアの名前をエクリチュールフェミニンだと論じて、テンプルとナンシーに対してセシリアからの間接的な影響を見出している。(115) Reams は、ト書きに登場する女性たちがテンプルとナンシーの人生に文化的、歴史的背景を与え、覇権的な文化に対抗する女性の文化を形成していると指摘している(38) こうした批評家が指摘しているように、『尼僧への鎮魂歌』のテキストは、時空を越えた登場人物たちの関係性を示唆している。こうした女性達の連帯は、女性の抑圧とレジスタンスの歴史的連続性のなかで強調する。

女性同士の連帯だけでなく差異も描くことによって、この作品は南部におけるホワイトネスの問題をさらに掘り下げる。確かにテンブルとナンシーは、白人の女主人と黒人の女中という人種と階級の違いを超えた結びつきを構築した。しかし、過去の告白のなかで、テンブルは、ナンシーとの友情において自分の、人種的、階級的優位性を利用していることを明かし、二人の間の差異と、テンブルのホワイトネスを露呈してしまう。“Somebody to talk to, as we all seem to need, want, have to have, not to converse with you nor even agree with you, but just keep quiet and listen... somebody paid by the week just to listen, which you would have thought would have been enough... (137-38)テンブルの「ただだまって、聞いてくれる誰か」という言葉は、白人家庭の台所で人種、階級を超えて女性達が築く友情に根ざす人種的ヒエラルキーの問題を仄めかす。⁷

さらに、女性のレジスタンスと古き良き南部を象徴する南北戦争を生き抜いた「不屈の女性たち」と現在の南部の差異を示唆する。ト書きの部分では、「不屈の女性たちが」死に絶えた、変貌する南部社会が次のように描かれている。

because at last even the last old sapless indomitable unvanquished widow or maiden aunt had died and old deathless Lost Cause had become a faded (though still select) social club or caste, or form of behavior when you remembered to observe it on the occasions when young men from Brooklyn, exchange students at the Mississippi or Arkansas or Texas Universities, vended tiny Confederate battle flags among the thronged Saturday afternoon ramps of football stadia.(212)

歴史家ジョアン・スコットは私たちが一貫性のある歴史的物語や、アイデンティティを構築するために使用する「ファンタジー」または「エコー」という意図的な想像力の操作の存在を指摘して、それによって作り上げられるアイデンティティの連続性や本質主義的なアイデンティティを批判している(“Fantasy Echo” 287)。⁸社交クラブや、南部連合旗といった矮小化された南北戦争の名残は、南北戦争という「ファンタジー」によって作り上げられた、連続し一貫した南部の歴史、普遍的なアイデンティティとしての「南部人」、「南部女性」、「黒人乳母」といった概念に揺さぶりをかける。

ナンシーに対するテンブルの最後の問いかけは、ホワイトネス構築の基盤を支える「南部淑女」というアイデンティティの揺らぎを示唆している。先にも述べたように、『尼僧への鎮魂歌』はテンブルが自らのセクシュアリティを抑圧し、家父長制的価値観が求める女性の役割へと回収される形で物語を終える。しかし、処刑場に去っていかこうとするナンシーに対して、テンブルは“I know what to do, what I am going to do; I found that out that same night in the nursery too. But let Him tell me how. How? Tomorrow, and tomorrow, and tomorrow”と問いかける(236)。このナンシーへの問いかけは、自ら受け入れた妻/母と

いう役割への不安をも同時に表しているのだ。

『尼僧への鎮魂歌』攪乱する女性達の連帯と差異は、Paradiso が指摘する「最も有害なホワイトネス」であるギャビンという法に完全には他者化されえなかった声として、40年代から50年代初頭の南部の伝統的な人種とジェンダーイデオロギーの矛盾を明らかにする。ナンシーとテンプルの人種と階級を越えた友情について、Dian Roberts はバスボイコットをはじめとする公民権運動において、人種と階級を越えて協力する黒人と白人の女性たちの姿を予見するものと解釈している(217-223)。Barbara Ladd はこの作品に見られる女性登場人物の主体性を、第二次世界大戦以降、アメリカ社会で存在感を増す女性たちとの関連のなかで論じている(482-51)。連帯と差異とによって描かれる『尼僧への鎮魂歌』の攪乱する女性達はまさに、こうした批評家達が指摘する南部社会を取り巻く時代の変化と、それに伴うホワイトネスの揺らぎを仄めかしている。

結論

30年代に『サンクチュアリ』で、法が内包する家父長制的抑圧と弁護士ホレスのパターナリズムの両方を鮮やかに相対化してみせたフォークナーは、『尼僧への鎮魂歌』にはもはや存在しない。ギャビンが象徴するホワイトネスの背後にあるレイシズムやセクシズムといった矛盾を十分に認識しながらも、他の多くの南部人と同様に法を拒絶し、伝統的な南部白人至上主義的イデオロギーを肯定しているように見える。しかし盲目的それに固執する代わりに、フォークナーは伝統的な価値観に生じる、テンプルやナンシーといった裂け目も同時に描きながら、公民権前夜の南部社会とホワイトネスをめぐる状況を探求し、作品のなかで捉えようと試みている。ホワイトネスにこうした他者達の痕跡を標すことは、無色でゆえに普遍的な白人という人種アイデンティティを脱構築することである。Thadiaz Davis は、フォークナーという作家について、次のように述べている。

Faulkner constructed characters who are consciously white, radicalized as white, and depicted the construction of whiteness within southern and American society. As a result, he allowed outsiders to know in ways not otherwise available to them one ongoing narrative of white people in psychological nudity (Davis, 254).

『尼僧への鎮魂歌』における法は、ホワイトネスをめぐる当時の状況とともに、南部白人/男性の偽らざる姿を描き、そして曝しながら「南部で白人/男性」であることの意味を作品のなかで真摯に問い続けた作家フォークナーの姿勢も同時に映し出している。

¹ この時期の人種問題をめぐる最高裁の動きについては、Bardolph 233-38、Williamson 300-314、阿川 228-272 を参照。

-
- 2 この時期のフォークナーの人種問題に対する姿勢については議論については、Polk の “Man in Middle” を参照。
 - 3 この時期の人種問題に対するフォークナーの姿勢について、詳しくは Blotner p.490-631 参照。
 - 4 **Paradiso** はナンシーによる赤ん坊殺しについて、赤ん坊を殺したいというテンブルの破壊的な衝動を、白人女性の「汚い仕事」を代わってやらねばならない黒人女性ナンシーに投影しているとしている。(31)
 - 5 ナンシーの沈黙を含む言語による攪乱について、Janet Wondra はバフチンの理論を援用しながら論じている。Wondra 43-59 を参照。
 - 6 テンブルの手紙と主体性の議論については、Reams 31-52 を参照。
 - 7 テンブルとナンシーの関係について、Reams は支配的な力によって、二人の人種と階級を越えた関係が遮られているゆえに、二人の言説は “unimagined” で “undefined” なものであり続けるとして、二人の差異にレジスタンスの可能性を見出している。Reams 47 を参照。
 - 8 経験とアイデンティティの本質化、主体の固定化については、Scott の “Experience” の 22-40 を参照。

引用参考文献

- Bardolph, Richard ed. *The Civil Rights Record: Black Americans and the Law, 1849—1970*. New York: Thomas Y. Crowell Company, 1970.
- Blotner, Joseph. *Faulkner: A Biography*. New York: Vintage Books, 1991.
- Butler, Judith, and Joan Wallach Scott ed. *Feminists Theorize the Political*. New York: Routledge, 1992.
- Davis, Thadious M. *Games of Property: Law, Race, Gender, and Faulkner's Go Down, Moses*. Durham: Duke University Press, 2003.
- Faulkner, William. *Requiem for a Nun*. New York,: Vintage Books, 1975.
- Faulkner, William, and Joseph Leo Blotner. *Selected Letters of William Faulkner*. London: Scolar Press, 1977.
- Frankenberg, Ruth. *White Woman, Race Matters: The Social Construction of Whiteness*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1993.
- Faulkner, William, and James B. Meriwether. *Essays, Speeches & Public Letters*. New York,: Random House, 1966.
- Hale, Grace Elizabeth. *Making Whiteness: The Culture of Segregation in the South, 1890—1940*. New York: Vintage Books, 1998.
- Ladd, Barbara. "Philosophers and Other Gynecologists': Women and the Polity in *Requiem for a Nun*." *Mississippi Quarterly* 52.3 (1991): 483-501.
- Millgate, Michael. *The Achievement of William Faulkner*. Athens, Ga.: University of Georgia Press, 1989.
- Moreland, Richard C. *Faulkner and Modernism : Rereading and Rewriting*. Madison, Wis.: University of Wisconsin Press, 1990.
- Paradiso, Sharon Desmond. "Terrorizing Whiteness in Yoknapatwpha Country" *Faulkner Journal* XXIII.2 (2008): 23-42.
- Polk, Noel. *Children of the Dark House : Text and Context in Faulkner*. Jackson: University Press of Mississippi, 1996.
- . *Faulkner's Requiem for a Nun : A Critical Study*. Bloomington: Indiana University Press, 1981.
- . "Man in the Middle: Faulkner and the Southern White Moderate" *Faulkner and Race: Faulkner and Yoknapatawpha*, 1986. Ed. Doreen Fowler and Ann J. Abadie, Jackson: UP of Mississippi, 1987. 130-151.
- Reames, Kelly Lynch. "All That Matters Is That I Wrote The Letters': Discourse, Discipline, and Difference in *Requiem For A Nun*." *Faulkner Journal* XIV. 1 (1998):

31-52.

Roberts, Diane. *Faulkner and Southern Womanhood*. Athens: University of Georgia Press, 1994.

Scott, Joan W. "Experience" in Bulter and Scott:22-41.

---. "Fantasy Echo: History and the Constitution of Identity."
Critical Inquiry 27.2 (2001): 284-304.

Vickery, Olga W. *The Novels of William Faulkner : A Critical Interpretation*. Louisiana pbk. ed. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1995.

Watson, Jay. *Forensic Fictions : The Lawyer Figure in Faulkner*. Athens: University of Georgia Press, 1993.

Williamson, Joel. *William Faulkner and Southern History*. New York: Oxford University Press, 1993.

Wondra, Janet. "Play within a Play: Gaming with Language
in *Requiem for a Nun*." *Faulkner Journal* VIII. 1 (1992): 43-59.

阿川尚之『憲法で読むアメリカ史』(下)、PHP新書、2004年